

ヘルマン・ヘッセ 「荒野のおおかみ」について

助教授 田 中 博

はじめに

「ツァラトゥストラは民衆を見つめて、いぶかった。やがて、彼はかく語った。人間は、動物と超人との間に張られた一本の綱だ——深淵の上を渡る綱だ。危険な渡り、危険な途上、危険な回顧、危険な身ぶると停止だ。人間において大いなるところは、彼が橋であって、目的ではないことだ。人間において愛されうところは、彼が過渡であり、没落であることだ。」(1) すでにニーチェは十九世紀にかようにして、神と人間を告発していた。人間が真の人間として実存するのはいかなることか。現代文学における人間実存・アウトサイダー論に先立ち、すでに深く悩み、その危機に勇敢にいどんだ人の言葉を、私が、ここに「荒野のおおかみ」を論ずる、一つの出発点と考えたい。ヘルマン・ヘッセが「デミアン」の表扉に記した、次の言葉ほど、私の小論のテーマにふさわしいものはないと思う。「私は自分の中からひとり出て来ようとしたところのものを生きてみようとしたに過ぎない。なぜそれがそんなに困難だったか。」(2) <Warum war das so sehr schwer?> 自分自身であるものを生きたいと願う人は——コリン・ウィルソン*によれば、知的アウトサイダーと呼ばれ、大衆、ブルジョワ、体制の側から区分されることになる。そうして、自分を生きようとする者は、「孤独になることはすべて罪だ。」(3) といって糾弾され、「善くて義なましい人々に用心せよ！彼らは好んで、おのれみずからの徳を案出する者を、十字架につける、——彼らは孤独な者を憎むのだ。」(4) それ故に増々孤独の地獄に突き出される。「荒野のおおかみ」ハリー・ハラールの悩みを、ヘッセはニーチェに、その似姿を見ているのです。「人間の生活がほんとの苦悩・地獄となるのは、二つの時代と二つの文化と宗教とが交錯する場合にかぎるのです。……ニーチェのような人は、一世代もさきに今日の不幸を苦しまなければなりませんでした。——彼が独りで、理解されずになめつくさなければならなかったことを、今日無数の人が苦しんでいるのです。」(5) この苦悩を「荒野のおおかみ」の中で分析し、詳細を調べてみたいと思う。ハリー・ハラールとは何か。現代人の苦悩とは何か。そして苦悩を通して救いはあるのかを問うてみたい。

(1) 「荒野のおおかみ」の概要

* コリン・ウィルソン Colin Wilson 1931年イギリス・レスターに生まれる。文学評論「アウトサイダー」を1956年ロンドンで出版。好評を受ける。

高校を出て、勤め人である「私」が住んでいるお婆の家に、ある日、五十がらみのハリ－・ハラ－と名のる「荒野のおおかみ」が部屋を借りて、同居人となった。彼は、「私」とちがって、勤めを持っている風でなく、〈自由人〉で〈思想の人間、書物の人間〉であって、実際的な職業を営んでいないことが、はっきりした。「私」は、規則的な毎日を送る、市民的人間の一人であったので、彼を疑いの目で見たのが正直な第一印象であった。ただ、はずれてはいるが、野蛮な人間ではないので、二・三短い交流があって、少しは彼のことを知るようになり、彼の人となりを一歩理解した頃に、突然、彼は町を去ってしまいました。思いもかけず、彼が、私にここですごした間に書いた原稿を、自由にしていよと手渡されたのです。その原稿が、ハリ－・ハラ－の手記のすべてであるという構成になっているのです。この小説の概要は、編集者の序文〈Vorwort des Herausgebers〉・ハリ－・ハラ－の手記〈Harry Hallers Aufzeichnungen : Nur für Verrückte〉・荒野のおおかみについての論文〈Tractat von Steppenwolf : Nur für Verrückte〉が、彼の残した手記の中に、小冊子〈Tractat〉がはさみ込まれるという構成になっています。私の手元にあるSuhrkamp Hausbuch 1961年版では、この小冊子は、わざわざ黄色ページがはさみ込まれているという小説にしてはめずらしい手法がもちいられています。この小説には、もち論、荒筋は、あることは当然ですが、それをたどることにあまり意味がない。〈Nur für Verrückte〉狂人のためだけに記されているところに荒野のおおかみ・ハリ－・ハラ－なる主人公が予見されるであろう。その意味で、知的アウトサイダーである、ハリ－・ハラ－とは何かを解明することによって、「荒野のおおかみ」を論じたい。

(二) アウトサイダーとしてのハリ－・ハラ－

「かつてハリ－という名で、荒野のおおかみと呼ばれた男がいた。二本の足で歩き、服を着ており、一個の人間であったが、実際はやはりまさしく荒野のおおかみであった。頭のよい人間たちの学び得ることをたくさん学んでいた。そしてかなり賢い男たちであった。しかし、彼が学ばなかったことがあった。それはつまり、自分と自分の生活に満足することだった。それが、彼にはできなかった。彼は満足しない人間だった。」(6) 前述したように、彼は実生活を持っていない。「職務を遂行し、一日や一年の時間配分を守り、他の人に服従しなければならないという観念より、いとわしい空恐ろしい観念はない。」(7) それにもかかわらず、いろんな点では全く市民的に暮している。こういう人間をC・ウイリソンは彼の〈アウトサイダー〉の中で、知的アウトサイダーと呼称している。ハリ－・ハラ－はまさに中年のアウトサイダー、もはやスカートが風にそよぐ度に心をときめかすような青年ではなく、人生の中ほどに到達して、なお自分自身への道で悩む、悩みの天才・ハリ－・ハラ－は現代の知性人の共通の苦悩を背負っている。「多くの芸術家は特にこの種類に属している。これらの人間はみな二つの魂を二つの性質を内に持っている。彼の中では、神的なものと悪魔的なもの……敵対したり、もつれたりして、並存したり、からみ合ったりしている。……時としてまれな幸福の瞬間には、非常に強いもの、名状しがたいほど美

しいものを体験する。……こうして幸福の海の上の貴重なたまゆらな幸福のあわとして、すべての芸術作品はできる。」(8) この幸福な瞬間の中に意味を見い出さなければ、彼らの生活は不幸に痛ましく分裂し、無意味になってしまう。ハリー・ハラーの苦悩のはじまりは、〈人間的な性質とおおかみの性質〉を持っていたことだ。言いかえれば、アウトサイダーであったことにある。実生活から逃れて独立を求めて生きて、自由のまったただ中に立ってみると、突然、自分の自由は死であり、世間は無気味なやり方で彼をほったらしにしていることを、さとることになる。「力の人は力によって滅び、金の人は金によって滅び……荒野のおおかみは、彼の独立のために滅んだ。」

(9) 酒場で出会ったヘルミーネという女は、それをみごとにあばいて次のように言う。「じゃ、あんたは踊れないのね？全然ね？ワンステップさえ？そのくせあんたは、生きるためどんなに骨を折ったか、だれにもわかりやしない、と言い張るのね！大げさなことを言ったのね。あんたの年ではもうそんなことするもんじゃないわ。そうよ、踊ろうとさえしないで、生きるために骨を折ったなんて、どうして言えるの？」(10)

(三) ハリー・ハラーの救済

独立のために滅ぶ、ハリー・ハラー・荒野のおおかみに対する救いはあるのだろうか。それを問う前に、C. ウイルソンが、〈アウトサイダー〉の中で、アウトサイダーの「道」に関して整理した、次の二つは重要であるので、言及しておきたい。

(1) 「アウトサイダー」の救済は「両極限にある。」

(2) 脱出口がどこにあるかがわかるのは「悟り」とか、熱度の強烈な瞬間などにおいてであることが多い。(11)

荒野のおおかみ・ハリー・ハラーの救いは、「ハリーが自分自身をおおかみ人間と感じ、二つの敵対し対立するものから成立していると考えるのは単純化する神話にすぎない。」(12) という前提を修正することによってはじめなければならない。〈二つの魂ではあまりに少な過ぎる〉のである。「人間は決して固定した永続的な形体ではない。人間はむしろ一つの試み・過渡状態である。自然と精神との間の狭い危険な橋に他ならない。」(17) 橋を渡りはじめた者は、〈あとに引返す道は全くない。〉「いよいよ遠く罪の中へ、いよいよ深く人間となることの中に通じている。自殺してみても、哀れな荒野のおおかみよ、真剣には役に立たないだろう。君はきっと人間となる。もっと長い、もっと骨の折れる、もっと困難な道をたどることだろう。……君の世界を狭くし、君の魂を単純化する代りに、君はいよいよ多くの世界を、しまいには全世界を、君の痛ましく拡大された魂の中に受け入れなければならないだろう。」(14) 作者、ヘルマン・ヘッセは、ここにハリー・ハラーの救いをもとめたと私には思える。なお、楽士、パブロの言葉を借りれば、次のようになる。「音楽について話すことなんか、全く価値がないんです。音楽では正しいってことは、一文の値打もないのです。……音楽することですよ、ハラーさん、できるだけよく、たくさん、熱心に音楽することですよ！……」(15) 危険な橋、危険な綱渡り、その地獄で、才能はきたえら

れ、創造的となる。真に人間としての人間になる道が、ここにさし示されていると言えないだろうか。

注 本文中で引用した「荒野のおおかみ」の訳文は全て、高橋健二氏のものを借用しました。

- (1) ニーチェ著・浅井真男訳「ツアラトゥストラはかく語った」 P.8 築摩書房
- (2) ヘルマン・ヘッセ著・高橋健二訳 「デミアン」 表扉 新潮社
- (3) ニーチェ著・浅井真男訳 「ツアラトゥストラはかく語った」 P.41 築摩書房
- (4) 同上 P.43
- (5) ヘルマン・ヘッセ著・高橋健二訳 「荒野のおおかみ」 p.22 新潮社
- (6) 同上 P.36
- (7) 同上 P.40
- (8) 同上 P.39
- (9) 同上 P.41
- (10) 同上 P.74
- (11) C. ウイルソン著・中村保夫訳 「アウトサイダー」 P.223 紀伊国屋書店
- (12) ヘルマン・ヘッセ著・高橋健二訳 「荒野のおおかみ」 P.49
- (13) 同上 P.52
- (14) 同上 P.54~P.55
- (15) 同上 P.111